



フィンランド アールト大学

アールト大学留学レポート

2021年9月から2022年6月にかけて、一橋大学の派遣留学制度を利用し、フィンランドのアールト大学・ヘルシンキキャンパスに留学しました。アールト大学は美術大学、工科大学、経済大学が合併して2010年に設立された比較的新しい大学です。



キャンパスは自然が豊かです[著者撮影]

学生生活

ヘルシンキ中央駅から地下鉄で20分ほど移動した場所にあるオタニエミ半島がアールト大学のキャンパスです。自然豊かなキャンパスのなかには大学の建物のほかにアパートやスーパーマーケット、教会や保育園などがあり、ひとつの町のようになっています。多くの学生がキャンパス内に住んでおり、緑やピンクや白のオーバーオールを着て様々な活動

をしています。これはフィンランドやスウェーデンに見られる学生文化で、学生たちは学科ごとにお揃いの色のオーバーオールを着てパーティーやイベントを企画します。留学生もコミュニティに入ることができ、私もオーバーオールを着てサウナめぐりやラップランド旅行に行きました。また、キャンパス内では偶然の出会いも多くあり、友人に誘われて詩の朗読会に参加したり、キャンパスに住んでいるご家族と一緒にピクニックをしたのも良い思い出です。

授業

講義形式の授業も開講されていましたが、教室の外に出て体を動かして考える授業が多くありました。なかでも、冬が暗く長いフィンランドならではのUnavoidable Darknessという授業が印象に残っています。暗くなった夕方頃に外へ出てキャンパスの森の中を散策し、暗闇を身体で感じながら、ほかの学生と話し合ったり、絵や詩を作ったりすることを通して暗闇について考えま

した。また、グループワークやプロジェクト型の授業も豊富にあります。サイエンス・フィクションを政治や思想との関係で考えるScience Fiction Mattersという授業では、4時間の授業の間にランチの時間があり、そこで毎週いろいろな話をした2人とは今でもオンライン読書会を続けています。

留学先としてのフィンランド

自然に囲まれた環境で個人的なことや社会的なことを友人たちと話しながらゆっくり考えることができ、私にはとても良い留学先でした。



それぞれの言語で詩を朗読する会に参加しました [著者撮影]

オ ス ス メ の 一 冊



ミネのかけら：ムーミン谷へとつづく道

富原真弓著（岩波書店、2020年）

【請求記号】9100: 3504

シモーヌ・ヴェイユとトーベ・ヤンソンの訳者として知られる著者の留学・旅行記です。人生を新しい方向に開いてくれるような偶然の出会いがあるのも留学の良さだと思います。

執 筆 者 紹 介

泉翔太 / 言語社会研究科 修士2年

最近朝鮮語の勉強をはじめました！

写真は2.7ユーロで食べられる、アールト大学のおいしい学食です。

